

眼科診療における 漢方薬

国際親善総合病院 眼科 部長
鈴木 高佳 先生

平成 6 年 日本医科大学 卒業
平成 9 年 横浜市立大学医学部付属病院 眼科
平成 11 年 藤岡眼科医院
平成 13 年 佐伯眼科クリニック
平成 14 年 東京歯科大学市川総合病院 眼科
平成 15 年 同大学水道橋病院 眼科
平成 18 年 国際親善総合病院 眼科 部長



国際親善総合病院のルーツは、1867年に横浜に開設されたThe Yokohama General Hospitalにまでさかのぼる。その後、第2次世界大戦直後の1946年に国際親善病院として、さらに最近、社会福祉法人 国際親善総合病院と名称が変わり今日に至っている。それに伴い、以前は横浜の繁華街にあった病院は住宅街である泉区に移転し、地域中核的急性期病院としての役割を果たしている。今回は同病院の眼科における漢方診療、とくに柴苓湯による糖尿病黄斑浮腫に対する治療について、眼科部長の鈴木高佳先生にお話をうかがった。

当院眼科の特徴

私は当病院に赴任してまだ2年ですが、当科では以前からの診療内容をより一層充実させ、幅広い眼科疾患に対し、専門性を高めた医療を行っています。

なかでも代表的な眼科疾患である白内障については、以前に勤務していた東京歯科大学水道橋病院のビッセン宮島弘子教授のご指導を受け、極小切開の術式で手術時間も短くきわめて低侵襲な手術を行っています。その結果、1日あたりの手術件数も10件以上となり、質的にも量的にも県内で有数の白内障手術施設であると自負しています。

さらに網膜硝子体手術も低侵襲な最新の術式を採用することで、従来の術式では得られなかった良好な術後経過と早期退院を可能にしています。また、保険診療にはまだ至ってはいませんが、新世代の多焦点眼内レンズによる白内障や老眼の治療も手掛ける予定です。多焦点眼内レンズについては、臨床治験の担当医師を経験したこともあり、当病院でも積極的に取り組んで、この分野の先駆的な病院となることを目指したいと思っています。その他には加齢黄斑変性に対する光線力学的療法も県内でも有数の実績があることから、さらに充実を図る予定です。

われわれとしては、このような先駆的でクオリティが高く、かつ安全な治療を提供できる眼科を目標としています。

糖尿病黄斑浮腫の病態と治療

人口の高齢化に伴い増加傾向にある眼科疾患の一つに糖尿病黄斑浮腫があります。これは血管内皮細胞および網膜色素上皮細胞により構成されている血管網膜関門の破綻によって、黄斑部に血漿成分の漏出が起こり、網膜神経線維実質層に浮腫(網膜膨化)を起こした病態です。慢性の経過で視力低下を来とし、治療に難渋することが多い疾患です。

糖尿病黄斑浮腫に対する治療法としては、レーザー、トリアムシロンなどの副腎皮質ステロイドの局所投与、硝子体手術など種々の方法が試みられていました。しかし、黄斑へのレーザー光凝固や硝子体手術は組織侵襲が大きく、早期から積極的に施行することは躊躇されます。また、ステロイドなどの薬物療法は、眼圧上昇、易感染性さらにはステロイド中止後のリバウンドなど問題点が多くありました。

糖尿病黄斑浮腫の治療における 柴苓湯の可能性

糖尿病網膜症や網膜静脈分枝閉塞症などに伴う黄斑浮腫の治療には、柴苓湯が有効であることが従来から経験的に知られていました。その作用機序としては、柴苓湯が有する抗炎症作用と利尿作用が考えられています。柴苓湯の抗炎症作用については、副腎ステロイドの増強作用や線維芽細胞抑制効果などの多彩

な薬理作用が報告されており、何らかのステロイド様作用が期待できます。また、利水作用については、西洋医学的には糖尿病網膜症により破綻した網膜の微小循環を改善させ、液体環境のホメオスタシスを改善させる作用があると考えられています。

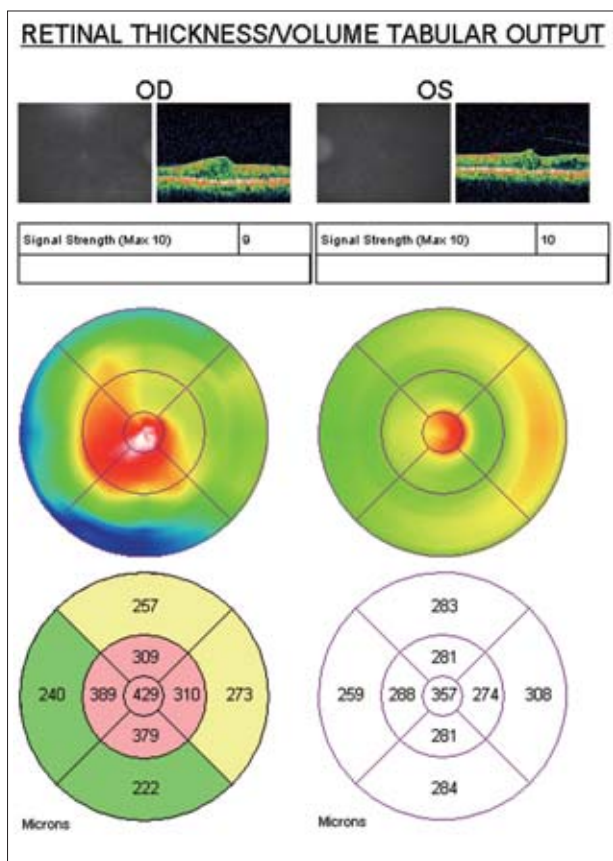
網膜浮腫を起こす原因は様々ですが、何らかの機序により血管内皮細胞や網膜色素上皮細胞に働きかけ、ポンプ作用を改善し網膜実質に貯留した血漿成分を減少させ、浮腫を軽減させることで、血管内皮細胞のバリア機構を改善することが柴苓湯の主な作用メカニズムではないかと推測しています。

光干渉断層計を用いた糖尿病黄斑浮腫治療における柴苓湯の有効性

糖尿病黄斑浮腫に対する柴苓湯の有効性の報告はこれまでにもありましたが、定量的に評価した報告はほとんど見当たりませんでした。

近年、光干渉断層計(optical coherence tomography: OCT) が普及し、さまざまな眼科疾患の治療効果判定にも利用されるようになり、当院でも一昨年より

図 黄斑浮腫の OCT 所見



OCT3000 を導入しました。そこで、当科の佐田俊朗先生の協力を得て、糖尿病網膜症に伴う黄斑浮腫に対して有効とされていた柴苓湯の治療効果を定量的に把握するため、OCT を用いた検討を行い、昨年の日本網膜硝子体学会で発表しました。

対象は、当院眼科を受診し、糖尿病網膜症に伴う黄斑浮腫と診断され、柴苓湯の内服に同意した患者さん5例(10眼)です。柴苓湯は1日8.1gを1日3回、8週間以上継続服用とし、服用前、服用4週後、8週後に、OCTを用い中心窩網膜厚、傍中心窩網膜厚、黄斑体積を計測し、合わせて眼圧や視力についても計測しました。

詳細は論文として横浜医学に投稿中ですが、中心窩網膜厚や黄斑体積は、柴苓湯の服用前に比べ服用8週後では有意な減少効果を認めました。

視力の有意な改善までには至っていませんが、手術療法に比べ、非侵襲かつ安全性も高いことから、柴苓湯が糖尿病黄斑浮腫の進行を予防するために有用性の高い薬剤であることが定量的に評価できたのではないかと考えています。

加齢に伴う眼科疾患を見据えて

今回用いた OCT は、非侵襲かつ定量的評価が可能であり、この結果を患者さんに示すことで、患者さん自身の病態の理解を高め、さらには治療効果を視覚的に訴えることができるためコンプライアンスの向上や動機付けにも役立ちました。

糖尿病黄斑浮腫に限らず、わが国における人口の急激な高齢化を考えると、加齢に伴う眼科疾患がますます増加することが予想されます。これらの疾患に対して、勿論西洋医学的なアプローチは不可欠ですが、治療の限界もあり、漢方薬が有用な場合も少なくないと思います。そのためにも、漢方薬の臨床効果を今回のような定量的かつ客観的な方法で評価することが重要ではないでしょうか。